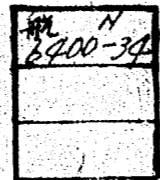


電子複写不可

複製史料

32A の航空基地の設置(沖縄)

防衛研究所戦史室



昭和二十七年三月二十六日
沖繩戦の真相に就いては先に第三十二軍高級
参謀の著書「沖繩戦の最期死生」門に詳細に記
述してあつて西将軍の最期も手に取る如く記
録されて居る亦今般西将軍の遺骨が発掘され
た事は悲しい中にも嬉しい事知れせいで
沖繩戦が第二次世界大戦の終末争を告ぐべき
悲慘凄烈な戦であつて亦戦略的軍大使命を持
つて居つた其の責任を負はされるのが牛島元

No. /

昭和二十七年三月二十六日沖繩戦の最期牛島
長元大將の遺骨發掘の記事を讀んで
沖繩戦の真相に就いては先に第三十二軍高級
参謀の著書「沖繩戦の最期死生」門に詳細に記
述してあつて西将軍の最期も手に取る如く記
録されて居る亦今般西将軍の遺骨が発掘され
た事は悲しい中にも嬉しい事知れせいで
沖繩戦が第二次世界大戦の終末争を告ぐべき
悲慘凄烈な戦であつて亦戦略的軍大使命を持
つて居つた其の責任を負はされるのが牛島元

大将であり其の幕僚長として七面八臂の手腕
 を振ったのが長元大将であつた其の作戦主任
 参謀として知謀を絞つたのが北原参謀である
 而して北原参謀の自叙傳にも比すべき死生の
 闘には其の苦心の跡歴然と記述されし處
 はない。而して牛島元大将の人柄並に長元大
 将の豪傑振りも其の中に記述されし處も高
 級参謀の個人の見解にしか過ぎないし。亦西將
 軍の人柄を知らぬ讀者は高級参謀の描寫した
 西將軍以外に之等西將軍の偉さを知らぬであ

であらう。私は高級参謀の記録をかく沖
 繩に於ける航空基地問題に於て大石と
 現地軍との意見の衝突あり且つ亦参謀次長
 から第十方面軍参謀長及第三十二軍参謀長宛
 に且つて我が國戦史に記録されたい程のお
 叱りを送つた後に國軍の企圖する如く航空作
 戦準備を進捗せしむべき使命を帯びし私の死
 地と定められた沖繩の地に第三十二軍の航空主任
 参謀として赴任したのである。
 忘らぬ昭和十九年九月十三日台湾行の空襲

に便乗して赴任したのであるが沖縄北飛行場
 から那覇の軍司令部迄の窓からや加乙
 運命の悲劇は演出さる。隊長は陸地と東支那
 海の波浪を眺めつゝ、自動車の窓にも遅しと軍
 司令部に到着して早速長参謀長に着任の申告
 をすすや翌や申告と同時に参謀長曰く「貴官の
 着任は一日十時の思ひで待つて居つた陸軍航
 空基地設置部部長井上中将から貴官の赴任
 延期の電報を受領したのが軍の事情は急を要す
 るのでお断りしたのだ」と言ふ終るや翌や大喝

一聲命令参謀長に與ふる命令と言つて兼ねて準
 備せられぬ筆記命令を請み上げられぬ司令長
 参謀長としては人権神の如き牛島軍司令官を輔
 佐する為又大和島参謀次長からお叱りを受け
 て此つて中興に討する細子關係もわつたりう
 し其の責任は此の如何に小生の手腕に期待
 をかけ居つたか内長元お好の筆記命令に明
 瞭に表はれ居る高級参謀は此の内の中に
 中興と現地軍のゆきまつても書いた處にお好
 内送の手ぬらしと見てか「大和島は送はる時飛

こと即座にゆずり刺すに深ふ如く奮闘いたし
 事と答ふに躊躇し居りた。向う局長が謀長
 事だ。からい。小水の腹腹を抜く。務り。と
 言いた。命令
 だが。事だ。大出急を要するから。言いた。心
 多。糾。つ。漸。山。い。か。其。の。事。二。項。に
 面。後。軍。管。内。飛。行。場。を。選。定。し。視。し。基。地。完。成。に。關
 し。参。謀。長。に。討。し。其。の。責。任。を。任。す。べ。し。と。の。言。は。し。め。ら。れ。し。事。は。私
 に。取。つ。て。は。お。前。の。言。ひ。に。因。り。手。紙。を。寫。へ。と。い。ふ
 事。だ。あ。ら。う。と。い。ふ。我。も。あ。ら。う。と。い。ふ。樹。木。の。如。く。詢
 に。先。風。新。日。の。心。境。に。な。つ。て。現。地。軍。の。使。命。も。遂

行場設定の専門家と言はれたい。受井中佐は軍の
 参謀に投入して軍の内部から航空の張力を
 圖す。と。至。つ。た。と。評。し。て。居。る。か。大。出。急。も。現。地
 軍。小。水。の。腹。腹。に。刺。す。を。口。り。た。事。絶。大。だ。の。の
 長。に。相。違。ひ。の。信。が。る。小。水。と。し。て。お。赴。任。に。心
 を。揚。げ。し。た。事。は。如。何。に。せ。ぬ。長。参。謀。長。の。豪。傑。の
 大。胆。な。敢。を。墨。玉。の。方。策。と。此。に。此。を。悟。し。て。出
 張。の。岸。頭。に。立。つ。た。尾。留。に。も。比。お。べ。き。高。級。参。謀
 と。協。調。す。る。か。の。二。つ。の。問。題。だ。の。の。た。思。ふ。に。長
 参。謀。長。の。筆。記。命。令。を。示。し。て。予。や。否。や。毫。満。と。し

成し亦大に其の刺待に心添ふ好むものと確信
 しと居る お蔭で着任の翌朝より軍司令部を
 出たより二十日現地に赴いて其地の完成と専
 任したのどおつて漸く大に其の要望の如く是
 地の日鼻が一つなので参謀長の巡視を待つて
 是の處参謀長伊比島飛行場に着陸するや士
 増添候て貴友は台より参謀長に随伴せよとの
 事だ二十日振振りに司令部に搬遷した處か
 司令部は曰く「参謀参謀は着任の挨拶に来た所
 り多日迄一かも控えて見せなかつたが何處に行

つと居つたのかねいといはけるあつては将に日
 露戦争の六下別け日（唐手）の時大山大将が
 五五大砲の音がするが銃は一つと居るのかね
 いと云はれぬ如く質問を致したといふ事と詢は好
 一戦の統帥振りにあつた参謀参謀へといふ聞
 下参謀の今日迄大の着任の疎を副将に問は
 二振りあつたが着任して翌朝より現地を飛
 ぶ通り一は事終つて二十日振りに閣下と食卓
 を共にさせると云く先きに済したの始末とど
 ちと答ふるや参謀長司令部官の隣りで象牙

のパイプに金物(ハット)を吹こすやう阿々と大笑し
て満足の様子であつた

豪傑と言はれ偉い人といふ事は見方に依つて
色々定義をつけられらるか其の偉い人の思

策の中の人と云り常に積極的に其の人の考へ
て居ること考へようとして居る事は先手を打

つ事である亦相手が大布呂敷を振げればは
此方は更に大きい布呂敷を振げれば

玉事であると思ふ或る時がた長参謀長に或
る事ありやつて考案を受けに行つた處が長参

謀長曰く「管井参謀の考へて居る事は参謀長の
考へて居る事と同じだが其の文章は籠りも上

手だにいふは固束人だから助詞、使ひ方、時
は誤りがある参謀長の文をつけると此は

けつと云つてすうと日を通し赤の毛筆で
口新にして体裁を受けられた事がある

長参謀長は参謀であらうか何んであらうか其
の意圖は添はぬ事かあると馬鹿らわたりをやる

又馬鹿参謀と思鳴られた参謀であつたといふ話
だ 長参謀長に新しいと隣つと思つた事は後々

あり其の定例を尋ぐると次り標である昭和十
 九年十月十日沖繩第一回の空襲を受けられた時
 あり航空隊は航空隊と第一機隊階級に降した時
 に米軍の機動部隊が九州沖繩台湾と風濤しん
 基礎の封鎖任務をやつて来た大和艦隊は之等
 に備へて操号任務と名称をつけ二番つた前法
 である河川艦隊の任務は沖繩島にやつた事な
 こういふと吾は上にお務上知の一人 標 隊
 であり各部隊を激動するやうに被空調査を行ふ
 やに我利我害や米軍艦隊の基地や攻勢の地や

攻勢の部隊や機動の威力調査やうに極めると
 忙を極めた那覇市に海軍を招つておつた軍司
 令官や参謀長其の他部長の境け出され又海
 軍の小艦隊が場を此人と壊滅に近し報告を受
 けた大風一過した後の被害調査や報告やらで
 繁雑を極めつた時空軍海軍の参謀から電
 話がかつたつた来た事。内容はおりの通りであつ
 た海軍の昨日台湾沖の決戦をやることと此空
 しんをしつた日海軍機五つの機が之れに参加
 する軍司令部から連絡が来たをしつた沖繩飛

行場を根拠として進行するの如何伊藤記の通
 リ昨日の空襲及び機銃掃射は其の収容所が伊
 いので陸軍が一切引き受けて営々と進めようか
 と云ふ判断の如何に「私」としては法戦に比定
 に至つては陸軍の海軍の色眼鏡で見ると極
 どの不い大衆的見地から帝國の存亡に一切引
 受けるに即答して其の収容方法や司令部の事を
 海軍に押し各部隊長と電話口には呼ぶ出して詳
 細に且つて指示した後大尉が及知事宛電を艦隊
 司令官宛の電文を起草して参謀長の法戦を受

くべく高級参謀の宿舎を訪れと(高級参謀の宿
 舎は司令部内に在つて参謀長の境を出さぬと寄寓
 しあり)其の時参謀長の陸軍部長とロソソの
 吏で基を固むに居つた高井参謀長ニとの談
 事を報告し出つ事の重大性と鑑み事前に参謀
 長の内謀を受くべき處の如何を参謀長と要
 し急いで処置すべき事等ありましたので事
 前参謀長と受けおの帝國の現状に鑑み海軍の要
 求を一先引き受け海軍の剛直の如何の台湾沖の決
 戦に軍として全幅の協力をなす決心と採りました

から甲了款を配る度と附加した點つて一部は
 統を圖いこの旨の長参謀長の安室から端然と
 決りさつたと思ふが早いか例のバイロを在平に
 握り愛井参謀長は偉いといふ其の世をとし
 て是れ此と激賞した私の学問した書又二週に
 前に差出せば一讀してこれではさしひ出しこ
 の電報は家大の問題であるから手紙に「電文
 領せよはす」と附加すると決意せよこれに月並
 の参謀長であるが「あつた」をんなに大事件は何
 故に参謀長の取組に入ればかつたかと言ふは

だが其處が長参謀長の器の大きい偉い人であ
 る参謀の責任は参謀長が引く受けると言ふ大
 度量が常に持てる合せた所であつたのである
 次に備へて出つた事は其の部下長官長を軍司
 令部で招集して参謀長の統裁する各機を行つ
 た時である即ち軍の冲鋒に出に北り、作戦計
 画の指示である此に冲鋒字として玉砕は覺
 悟はして居るもの、米軍を何んとかして冲鋒
 の職減せんとする此は作戦の指示である参謀
 長の激怒として軍司令部の職を保持せんと

長考謀長は私を逸するに錫二羽と屠つて夕食
 此等(等)しと待つて居つたは此等(等)の
 時次(時)のつたは三考謀長宿舎に返水に考謀長
 行政口(口)討(討)て胡(胡)弁(弁)の器(器)と園(園)人の片(片)つたは私(私)か
 現(現)はる、甲(甲)部(部)や夕(夕)食(食)の準備(準備)を命(命)じ酒(酒)一(一)杯(杯)とい
 ふ(ふ)工(工)合(合)てあつたは私(私)内(内)前(前)以(以)つて酒(酒)の修(修)載(載)せぬ
 と(と)いふ前(前)報(報)北(北)にのつたは同(同)く修(修)載(載)せぬあり一
 考(考)謀(謀)長(長)の政(政)事(事)つて是(是)井(井)
 考(考)謀(謀)長(長)の政(政)事(事)つて是(是)井(井)

考謀長の意見と関係下へく決(決)心(心)したは但(但)し軍(軍)級(級)を
 考(考)謀(謀)長(長)の政(政)事(事)つて是(是)井(井)

性(性)の(の)北(北)

の(の)北(北)

の(の)北(北)

の(の)北(北)

の(の)北(北)

此の如き出来の事と進むに
 一軍の比次計画の如きは是れ以上其れ
 の就いて意見は申出せしむるに非ずと前置せしむ
 又参考案といふ資料の如きは其れを
 其の只参考といふ程度の事と見做して考
 考案に参考長の耳を研給するの事ありあか
 らしむるに非ずと下さしむるに非ずと考へ
 るに非ずと考へたるに非ずと考へたるに非ずと考へ
 しむるに非ずと考へたるに非ずと考へたるに非ずと考へ

なく出来た戦争の結果を去るに非ずと考へ
 たり即ち此計画の如きは其れを
 是れに非ずと考へたるに非ずと考へたるに非ずと考へ
 得たるに非ずと考へたるに非ずと考へたるに非ずと考へ
 軍的又航空用兵の見地より見ると此計画は其れを
 飛行場と其れを其れを其れを其れを其れを其れを其れを
 や其れを其れを其れを其れを其れを其れを其れを其れを
 に非ずと考へたるに非ずと考へたるに非ずと考へたるに非ずと考へ
 方此の沖繩軍の如きは其れを其れを其れを其れを其れを其れを
 其の活動に非ずと考へたるに非ずと考へたるに非ずと考へたるに非ずと考へ

期待する任務の一部を以ては、如く思はるし、亦、如
 一日一寸の玉砕を以ては、是れ、敵を、是れ、在、意、有
 り、敵、軍、に、決、し、し、は、只、軍、は、其、の、命、命、を、込、め、入
 く、軍、自、力、に、決、つ、て、米、軍、に、出、血、を、強、要、す、に、過、さ
 り、と、し、

三、第一、三、軍、は、電、美、大、島、の、う、徳、之、島、沖、繩、島、島
 高、島、在、垣、島、の、真、つ、つ、徳、力、な、列、島、の、上、に、破、砕、せ
 ら、し、と、決、し、我、が、玉、海、軍、力、の、現、状、を、以、つ、て、し
 二、海、軍、と、し、て、の、機、能、を、如、何、に、可、能、に、あ、る、洋、艦、隊、を
 大、の、海、軍、の、機、能、を、如、何、に、可、能、に、あ、る、洋、艦、隊、を

高、島、の、一、個、の、同、歩、の、力、を、あ、る、に、垣、島、に、決、成、該、國
 の、り、と、決、し、中、島、の、機、能、を、如、何、に、可、能、に、あ、る、洋、艦、隊、を
 に、決、し、高、島、在、垣、島、の、真、つ、つ、徳、力、な、列、島、の、上、に、破、砕、せ
 知、し、と、決、し、我、が、玉、海、軍、力、の、現、状、を、以、つ、て、し
 此、中、島、へ、決、つ、て、は、那、お、や、略、し、其、地、を、破、砕、す
 二、と、し、決、つ、て、の、機、能、を、如、何、に、可、能、に、あ、る、洋、艦、隊、を
 三、と、し、決、つ、て、の、機、能、を、如、何、に、可、能、に、あ、る、洋、艦、隊、を
 に、決、し、高、島、在、垣、島、の、真、つ、つ、徳、力、な、列、島、の、上、に、破、砕、せ
 へ、決、し、と、決、し、我、が、玉、海、軍、力、の、現、状、を、以、つ、て、し
 定、と、破、砕、し、て、中、島、の、機、能、を、如、何、に、可、能、に、あ、る、洋、艦、隊、を

高の利権の如く私の企圖する。教育基礎の理念から将来の教育の
 の理想の進化 将政用と教育基礎の整備とを言ふ人々の教育
 上の進歩の如く 長考後長は二日間其の私の教育に於ては常に
 せられ 教育と此の人とを言ふに於ては教育の事を述べた教育
 を終了し。 ¹ 十官を言ふ事 考議と云 評議に著長以来其の
 あり得る者の如くは日多 金く果能知翔 評議に於ては教育基礎の進化
 に於ては整備し 教育と此の人とを言ふに於ては教育の事を述べた教育
 以上の教育に於ては此の如くは 教育の眼中には教育の進化
 個人や教育の如くは 教育の全精神を國家の企圖する一官の
 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは

20 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 21 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 22 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 23 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 24 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 25 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 26 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 27 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 28 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 29 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは
 30 坪の如く 教育の企圖する 教育の如くは 教育の如くは 教育の如くは

世に國家に構ふる知識の發見あり即ち二日間の教育
 に於て特に出発の趣ある者には此を基礎の理念を根柢とし
 理地に於て活用し得るものは一木一石一穂の土と雖も之
 此に戦力化するの能創力の附与ありて今日以降
 堂井参謀長ととも其の理念と実行力とは清良に傳
 授したることを確信して教育と統一人とす清良城に於て
 を初玉と結んぬ 長参謀長は席を立つて壇上に
 登りてや参謀長は私の考案の内容を説明し参謀長の
 堂井参謀長を見る眼に誤りはないと清良が堂井参謀長に教
 へうに以上は二の参謀長が教へられた清良は堂井参謀長の

敢て此を清良の理念に基き更に清良一木一石の益を
 發揮する如く清良の努力を振起し事を整え参謀長の訓示を
 與へて 斯くの如くは沖繩列島に於ては敢て此を清良の強
 化せしむるにありて 其の整理朝敵の私闘力能か堂井参
 謀長が参謀長とすとはしや、表で重報を待参し
 出勤して参謀長に申告すや 堂井参謀長は今迄の努力を
 讃へた後我が國には未だ参謀長の如くは清良の如くは
 る朝敵出で支那出でであることは参謀長の如くは通り
 悉の今迄の轉出の中央の海に機宜に通じた処置だと
 参謀長は心から祝福すよと 堂井参謀長の活動を望

この位仕事のやりよいお人を指定し得る大物
 は珍らしいと私に信じて居る其の最期死に就
 く事敏ずる如き西将軍の白刃の跡を忍び
 日本人に与るもの証しか西将軍の靈に手を合せ
 りいで居る此おうか思ひつゝ此儘に第三十二軍
 参謀長に於て當時を記述して西将軍の靈に捧ぐ
 る事は此闘争に数ヶ月其の部下に於て玉砕
 名もなき白骨と化して墓に七回霜雨雪に曝
 されつゝある十万人ある無縁御に討する敵軍の
 徴をらしめらば存平である。

いで居る西将軍と申経戦の最期を飾る旧陸軍
 の最期の戦いを飾った名にこそと言はざるを得ない
 長参謀長は風林将に豪傑の小さい事にはせつめを此か
 と云つて放任主義の出鱈目型ではな
 真面目な時と只諺を言ひ時と何判然と區別し
 て居る若し長参謀長を好ま嫌ふかある人と書
 ぶ者かありつめとし以らば長参謀長の善人の人
 柄を知らぬものであり極めて正義感の強い多
 趣味の通人である併し長参謀長の布呂敷の後
 姿を知つて其の上を廻れば万幸かといふ處で

